二次元ドリーム文庫／PDF立ち読み版

ぱられるパニック!

PARALLEL PANIC!

小説 狩野　景
挿絵 神保玉蘭

序章 006
第一章 蓬莱からの来訪っ!? 010
第二章 大変な一日だった 049
第三章 なんか憎めない 113
第四章 月明かりの微笑み 151
第五章 詩朱奈の決意 195
終章 246

登場人物紹介

Characters

藤枝 詩朱奈（ふじえだ しずな）

異世界の蓬莱皇国からやってきた皇女。祐の義姉として藤枝家に迎え入れられた。

睡蓮（すいれん）

反皇帝派に雇われ詩朱奈の帰還を阻止するためにやってきた女刺客。

藤枝 祐（ふじえだ たすく）

面倒見が良く穏やかな性格の少年。

冴（さえ）

蓬莱皇国剣士隊の近衛兵。クールで無表情だが少し天然気味。

『第三章　なんか憎めない』より

嘲るように告げる睡蓮の声が、少し緊張しているみたいに引き攣っていた。しかし面食らう少年は、その微妙なニュアンスに気がつかない。
「き、気持ちイイ……!?　えっち……って!!　ちょっと……」
当惑する少年の極太を前に、睡蓮がどっかとテーブルに腰を下ろす。短いスカートがふわりと捲り上がり、肩幅に開いた両腿の狭間にショーツが覗き見えてしまう。
(——ああっ！　パ、パンツ……ッ、見えちゃってるしっ!!)
丸みを帯びた下腹部を、青と白の縞模様が鮮やかな小さな布地がぴったりと覆っている。
太腿を蠢かせると捩れて、股間のクロッチ部分に縦の割れ目を食い込ませる。
睡蓮の太腿の奥から視線を引き剥がし身を起こそうとするのだが。
「起きちゃだめよ。今度は、その薄汚いモノを蹴り飛ばすわよ!!」
「あう……ッ！」
一撃を受けた腕の痺れがまだ収まっていない。あの勢いでペニスを蹴られたらと思うと背筋が凍りつく。それなのに、屹立する極太はなにかを期待するかのように勢いよく脈打ち、海綿体の芯に熱い疼きを込み上げる。
「ふん、なに興奮しちゃってるのよ。もしかしてあんたってそういう趣味なの？　蹴られた方が嬉しいとか……」
波打つ勃起の反応を目ざとく見ていて、睡蓮がからかってくる。
「——!!　ち、違……ッ。そんなわけ、あるか……っ！　いまのはあそこが、勝手に……」

自分でも驚いた肉体の反応を指摘され、真っ赤な顔でしどろもどろに否定しようとする。
「全然、説得力ないわよ。こんなにお汁垂らしちゃってたら……」
睡蓮の方も顔を赤らめているのだが、優位に立っているためか態度に余裕が表れてきた。
ただでさえ勝ち気な顔立ちにサドッ気さえ漂わせ妖艶に微笑する。
「ほら、こんなに、カチカチじゃない……!!」
紐編みの脛当てを着けてはいるが、部屋の中のためサンダルを脱いだ裸足の足をおもむろに、いきり立つ剛直の幹に押し当ててきた。
「──ふふぁあっ!?　つぅっ!!　はぁあああぁっッ！」
思いも寄らなかった奇襲に、はち切れそうな充血肉から脳天へと電撃が突き抜ける。
蹴飛ばすように激しくでもなく、恐る恐る触れるような繊細さもない無造作な接触だが、それだけに心の準備をする暇も、乱暴に扱われた後の激痛もなく、触れられた感覚だけが純粋に勃起を揺さぶった。
「くぅ……ふぅう、はぁあっ！　な、なに、してんの、睡蓮ッ!!　ぼ、僕の、ぼくの、ちんぽ、足ッ！　……足でぇっ!!」
滑らかな足の裏がヌリヌリと幹肌を撫でながら、蠢く足指で擽るように捏ね回してくる。
「気持ちよさそうにピクピク震わせちゃって……。先っちょから、変な液、いっぱい漏らしてる!!　いやらしいわね……足で弄られて喜ぶなんてッ！」
どうにもならない反応を一々あげつらわれ、侮蔑の笑みと共に嘲られる。

「そん……な、されたら……。誰だって……。ひううっ‼」

口答えしようとするのだが、睡蓮の足の刺激が勢いを増してきた。絶え間なく溢れかえる我慢汁が、ぬちゅっ！　ねちゃっ‼　と淫靡な音色を響かせながら塗りたくられ、根元から雁首まで満遍なく捏ねくり回される。ついには折り曲げた足指の間に亀頭を挟み込まれて、踏みにじるように上から圧迫されてしまった。

——グリッ‼　グリグリッ！　グニュ～ッ‼

「ひはぁああうっ‼　くうっ、ふぁあああぁっ！」

尿道に灼熱の切迫感が込み上げ、必死に括約筋を引き締め堪える。

行き場のない快感が肉幹を揺さぶり、少女の足裏に振動を伝えてしまう。

「あは……。変な感触、おちんちん……って……。表面はこんなぷにぷにしてるのに、鉄みたいに芯が、硬くて……っ！　なんだか、癖になりそうな触り心地……ッ‼」

——にぢゅっ！　むびゅっ‼　にゅっ！　きゅぷっ‼　むにゅむにょぬにょっ！

勃起肉を弄ぶ少女の吐息が次第に荒くなってきた。足指を折り曲げて亀頭を握り込むように圧迫し、夢中で捏ね回してくる。

「ふぅ——ッ！　く……ッ、ぁはぅっ‼　そんな、とこ、するなっ！　あぅうっ‼　も……勘弁、してくれっ！　睡蓮ッ‼　はふぁあ……ッ！」

亀頭の裏側を掻き上げられ、熱い痺れに混乱させられる。

「へ～、ここ、そんな気持ちイイんだぁ……。でも、まだまだ本番はこれからなのに、も

う泣き言？　あんたってばとことんヘタレなのね～」
おかっぱ髪の少女刺客がニンマリと残酷な笑みを蕩けさせ、ますます調子づいた。
（く……あ、しまった……ッ！　睡蓮、の奴……。今度はなにする、つもり……だ？）
これ以上刺激を与えられたら、さらにみっともない姿を晒してしまう。煮えたぎった塊は、極太の根元からいまにも溢れ出しそうに、ぐつぐつと沸きたっている。
（もろに、射精しちゃうよっ！　睡蓮の前でっ‼）
想像しただけでも情けなくて恥ずかしくて恐ろしい。しかも噴き出した後の白濁が、なにをしでかしてしまうのか考えると泣きたくなる。もうペニスを蹴飛ばされてもいいから逃れようと決心しかけた。だがその刹那、起こそうとした上体がかくんと脱力してしまう。
「ひうっ⁉」
股間を開帳させた少女が、両足の裏で破裂寸前の怒張幹をしっかりと挟み込んでいた。捲れ上がった短いスカートの下、露わにされた縞柄ショーツが、クロッチの部分に放射状の染みをじっとりと広げている。
（濡れて……る？　なんだよ、睡蓮……だって、僕のちんぽ弄って、興奮して……）
そのことをからかってやろうと思ったが、唇から漏れたのは小さな喘ぎだけだった。
――しゅぶっ！　ぬちゅぃっ‼　にゅっ！　ぬぷっ‼　ぬちゅちゅっ！
残酷な好奇心を宿す無垢な子供のような眼差しを祐に注ぎながら、睡蓮の足裏が剛直を上下に扱き始める。

「ふぁうっ！　だめっ、その動きッ‼　はぅうう、出るッ！　出しちゃう、からっ‼」
両足での挟み込みは安定感がなく、肉幹が暴れて予測不可能な方向に擦れる。溢れたカウパーのヌメリを介して脳裏が焼けるようなむず痒さを生み出す。
（くぅ……。足……足で、コスられるの、こんな、気持ちイィ……なんてっ‼　あう、これ以上……続いたら、射精ッ、漏らしちゃうよっ！）
されるがままになってはいけないと焦るが、拙い動作で華奢な少女の細足が上下すると、さらなる快楽を催促するように腰が迫り上がってしまう。
「ひゅわうっ！　ックゥ…………………ぅうぅぁあっ‼」
雁傘の裏部分が彼女の親指に刮げられて、焼けるような悦撃にだらしなく下腹が痙攣させられた。
「あは……はぁ……。お前ってば、気持ちよすぎて、変な動きしちゃってる。こんな姿、お姉ちゃんに見られたりしたら、きっと大変でしょうね？」
テーブルの上に後ろ手をついて座り、浮かせた両足の裏で挟んだペニスを扱く。義姉の命を狙って異世界から来た少女の意地悪な言葉が祐の劣情を揺さぶった。
——ドックンッ！
「な、なに……？　おちんちん、いきなり、大きくなって……ひゃうっ！　またっ‼」
まるでいままでが勃起前だったかのように、祐の逸物が急激にサイズを増していた。抑え込む少女の足を押し開いて一段と膨張した肉根に、グロテスクな青筋が脈打つ。

赤紫にどす黒さを加えた色合いでビュクビュクと蠢動する男性器を驚きの眼差しで睡蓮が凝視する最中、祐は興奮の極みにあった。
(こんなところを……ね、姉さん……詩朱奈にっ⁉　そんなっ！　だ、だって、僕、詩朱奈……好きなのにっ‼　睡蓮に、足でッ！　ど、どうしようっ⁉)
気持ちを打ち明け身体を許したばかりの義弟が、他の女の子にペニスを扱かれ喘いでいる。そんな姿など見せられたら、いくら心の広い義姉でも平静でいられるはずがない。
それなのにゾクゾクと心が震えてしまう。詩朱奈にはしたない姿を見られ、叱られると想像しただけで、奇妙に胸が沸きたちどうにもならなくなる。
(へ、変だよ……ッ！　こんな……気持ち‼　嬉しいわけない、はずなのにっ！)
最早男根は、自分でもギョッとするほどに長さと太さを増し、グロテスクな鎌首を急角度に反り勃たせてじゅぷじゅぷと絶え間なく我慢汁を垂れ流し続けている。
「ふあはぁっ♪　また、ビクンって……‼　ひょっとして、お姉さんにバレたらって、思ったら興奮しちゃった？　ん……う、また、大きくッ‼　へ、変な奴ッ！　そんなこと想像して、こんななっちゃうなんてっ‼　ば、ばっかじゃないのっ⁉」
「く……あぁ、違……うッ！　僕はっ‼　ふはぅううっ！　足ぃ、やめ……へぇあっ‼」
図星を突かれ罵られる戸惑いも、男根をいきり立たせる刺激となってしまう。
──にゅぷにゅぷじゅぷっ‼　シュゴッ！　きゅぴっ‼　シュブシュブシュブッ！
上下する足裏の狭間でのたうつ充血竿から濃厚な分泌液が飛び散り、二人の興奮汗の臭

いと混ざり合い、淫らな甘酸っぱさが部屋に充満する。
「あふぅん、変なちんちんっ！　バカ祐のちんぽ、ビュクビュクしてるぅっ‼」
その蠢く男根と、だらしなく呆けてよがる少年の表情に興奮を昂らせ、睡蓮は両足で絞るように圧迫を強めストロークを過激にした。
「くぁぁあううっ！　やめ……すいれ、ンンッ‼　足ぃ、強いっ！　ふぁぁあぁあううっ‼出るッ！　もう出ちゃうふぁぁあああっ‼」
足に挟んだ剛直で少年を自由に弄ぶ悦びに蕩ける睡蓮の笑顔へ懇願しながら、堪えきれず噴き上げてくる灼熱の怒濤に祐の意識が焼き切れる。
「はひぃあぁぁああぁ――――ッ！　くぅううっ‼　ふぁっ、ぬふぁぁぁあぁあっ！」
凄まじい液量に尿道が破裂しそうだった。息が詰まる狂おしい快感が陰茎で暴れ回る。
ぶびゅびぶびびびゅるびゅるびゅるぶばぁぁあぁ――――っ‼　どびゅっ！　どぴゅどびゅびゅぅうっ‼　ぶじゅばぁあっ！　どぷぽぷどぼばぁあ――――っ‼
鈴口をこじ開けた大量の白濁が高々と噴き上がり、部屋中にべちょべちょと豪雨のような勢いで降り注いだ。
「く……ふぁ……すごい、いっぱい……。祐のちんちんから、液でたぁ……。ん、ふぁ……変な、匂いぃ……これ、昨日の、狭い所での、あの匂いぃ……ッ！」
おかっぱの髪にも、喜悦に緩んだ顔にも、濃厚な精液がへばりつきゆっくりと垂れ落ちてくる。射精の瞬間を連写し、脱力を催す饐（す）えた臭気に睡蓮が恍惚の呟きを漏らす。

全然よくなさそうだった。物凄くいやそうな顔で押し黙る彼女の肩を、苦笑しながらポンポンと叩いてなだめる。祐自身も、幼い頃につけられたたっくんという呼び名をもうそろそろどうにかして欲しいのだが、詩朱奈は一向にやめそうにない。
「姫、処刑中止とはどういうことでしょうか？　彼女は貴女の命を狙ったのですよ」
呼び名のことでうやむやになった疑問を、冴が代わりに聞き直す。
「うん……。それはそうなんだけど。学園で襲ってきたときも、わたしが怒ったらもうそれ以上みんなには酷いことしないでくれたし、たっくんとも仲良くしてくれた。そんな娘が殺さなくちゃいけないほど悪い子だなんて思えない……」
「姉さん……」
祐も初めて会ったときから睡蓮が悪人には思えなかった。義姉が同じ印象を彼女に抱いていたことに嬉しさが込み上げる。
「あ、甘いわね……。さすが苦労知らずのお姫さまだわ。あたしは、食べてくためならいくらでも汚い仕事するわよ。これまでだって、この手で数え切れないくらい大勢を……。それでも生かしておくっていうの⁉」
内戦で家族を失い一人で生きてきたという彼女の過酷な生い立ちは、僅かにだが窺い知った。皇女を挑発するように睨んで悪ぶる様は、人を殺めて糧を得るそんな運命から逃れるために死を望んでいるように思える。
だが詩朱奈は一瞬悲しげな表情を浮かべると、華奢な身体を優しく抱きしめた。

「姫様っ！」
近衛剣士が色めき立つ。もし睡蓮がその気にならば絶好のチャンスだ。彼女を人質にこの場を逃れ、さらに皇女暗殺を遂げられるかもしれない。しかしボブカットの小柄な少女は動かなかった。豊満な胸の膨らみを押しつける柔らかな抱擁にただ無言で身を任せる。
「ごめんね……。国が大変だったのに、わたしだけ別の世界で平和に暮らしてた。レンちゃんが、つらい目にあっているのに、なにも知らないで……」
それは詩朱奈の所為ではない。クーデターが起きたことは幼い皇女にはどうにも出来ないことだし、別世界に逃がされなければ彼女自身、反乱軍に命を奪われていただろう。
それは睡蓮だってよく分かっているはずだ。
だから弁護することなく、祐も冴も口を噤んで見守る。
「わたし、立派な女皇になるね。もう誰も悲しまなくて済むように。レンちゃんがつらいことしないで暮らしていける国に出来るように。だから、わたしを許して……睡蓮」
頭を垂れる代わりに抱きしめる腕にギュッと力を込める。自分を殺そうとした少女に頬を寄せて硬くつぶった詩朱奈の瞼からひとしずくの涙が落ちた。
長い桃色の髪に顔を埋め、睡蓮の肩が震えた。もしかすると泣いていたのかもしれないが、次に顔を上げたときには、いままで通り気の強そうな表情が幼げな容貌に浮ぶ。
「ばっかじゃないの？　な、なに謝ってんのよ。あたしがあんたを殺そうとしたのよ。それなのに、あたしなんか許しちゃったりしたら……。どうなっても知らないんだから。ま

た狙われても文句いわないでよっ！」
少し鼻声だった。それを威勢のいい憎まれ口で誤魔化す。だが……。
「うん。でも、わたし結構すばしっこいんで、レンちゃんの攻撃も、全ッ然、当たらなかったから大丈夫だよっ！　暗殺、どーんとこいっ‼」
「――そうですね。確かにまったく危ないことなどありませんでした。詩朱奈姫が怪我でも負ったのならまだしも、掠り傷一つなかったわけですし。私も睡魔に襲われながらも楽勝でした。この程度のことなら、死罪にするのはやりすぎだったかもしれません。睡蓮殿、謝罪いたします」
あっけらかんとのたまわれ、睡蓮がのっそりと詩朱奈の抱擁から抜け出る。覇気のない様子で振り返り、少年に尋ねた。
「ねえ……、あたし、泣いてもいいかな……」
もうすでに涙目だった。
「うん……。――思いっきり怪我した僕って、なんなんだろ……」
肩を落として落ち込む睡蓮を支え、背中を撫でてなだめながら祐自身も情けない気分になってしまった。その一方で、詩朱奈の言葉が心に引っかかる。
「姉さん、いまの……。その、女皇にって、あの、いったい……」
無邪気に微笑む彼女におずおずと尋ねた。
「うん、わたし、蓬莱に帰るから……。たっくんとは、お別れだね」

あっけらかんと笑顔のままで、だが瞳の奥に張り裂けそうな悲しみを湛えて詩朱奈が答える。祐の目の前が、真っ暗に染まった。

「そん、な……だって、姉さんは、僕の……。なんで……や、やだよ……嘘、だよね⁉」

こうなることはなんとなく分かっていたはずだ。姉の性格を考えれば、自分の幸せよりも他の大勢の幸せを願うに決まっている。自分が戻らなければ、祖国が乱れると知って見過ごせるわけがない。だから、詩朱奈が決めたのなら、祝福してあげようと思ったのに。

口を突いて出る言葉は、見苦しい泣き言ばかりだった。

彼女の決断に喜んでいいはずの冴が、沈痛な面持ちになっていた。

睡蓮はただ無言で、なんの感慨も面に表さずじっとこちらを見詰めている。

「ごめんね、祐。でも、わたし本当は冴が来たときからもう決めてたの。だから、いままで我慢してた気持ちを伝えたし、祐と……」

穏やかな声で弟をなだめ、柔らかな抱擁に彼の震える身体を包み込む。

「──なんだか、わたしの身代わりさせるみたいで悪いんだけれど、レンちゃんには祐の側にいて欲しいな。最初から二人とも、なんだか仲良しだし」

蓬莱に戻っても苦難だけが待ち受けているだろう少女に、こちらの世界へ残れという。その薦めに睡蓮は受け入れるでもなく、拒むでもなく、無言で詩朱奈と視線を交わす。

「──これで、一安心。全部うまくいって一件落着だね～」

言葉を介さない見詰め合いで通じ合ったのか、義姉が笑顔を綻ばせる。

見とれる少年の悲しみに打ち拉がれた心が、その朗らかさに和らいだ。
「あとは、もう……思い出を作りましょ。いっぱい、いっぱい、胸の中がいっぱいになるくらいっ！　たっくんの思い出で、お姉ちゃんの胸をいっぱいに満たしてっ!!」
「──姉さ……し、詩朱奈っ！」
日の光を存分に浴びた綿毛のように柔らかな身体がのし掛かってくる。されるがままに受け止め、祐は仰向けに押し倒された。
その最中で無垢な顔立ちが、妖艶さを感じさせるしどけない笑みを浮かべる。
姉にこんな表情が出来るのかと胸が高鳴った。
途端に、股間の敏感部が解け崩れるようなむず痒さに包まれる。
詩朱奈の指が握っていた。
寝間着のズボンを引き下ろされてしまう。
急激に勃ち膨らんだ充血竿が、ぶるっ、と弾け出て急角度に聳える。
無言で見守る傍らの二人から、息を飲む気配があった。
「たっくんの……おちん、ちん……。んふ……ぁ、おっきくて、太い……っ！」
上擦った声で詩朱奈の囁きが震えた。頭だけを起こして様子を窺うと、祐の脚の上にむっちりと尻を降ろして跨がる義姉が匂い立つような色香を立ち上らせている。もとからほけ〜っとした表情をますます蕩けさせ、桃色がかった長い髪を垂らす頭が沈む込んできた。
「姉さんっ！　な、なにを……？　やめ……っ、ふはぁあぅっ!!」

ふさっと、彼女の毛先が腿に触れる。間を置かず、反り返った勃起肉の先端が唇のヌメりに銜え込まれ、熱い快感が脊髄を駆け昇った。
心地よさに崩れかけながらも顔を起こし続けると、桜色の唇にどす黒いグロテスクな肉が頬張られているのが見えた。
銜え込まれている部分が湿った熱に包み込まれて、ジンジンと痺れた。柔らかな粘膜の口腔に唾液が溜まり、亀頭にだらだらと垂れてくる。
「あふ……たっふんお、おっひふへ、お口、いっふぁいらお……。ん……あむ……」
口腔を押し広げる太さに顔を顰めながらも、口いっぱいに広がっているだろう饐えた味わいでとろんと目元を潤ませる。
(姉さん……ッ、し、詩朱奈が、僕のちんぽ咥えて、あ、あんな顔っ！)
心臓が高鳴った。途端にビュクンと筋張った幹が脈打って、怒張が一回り太さを増す。
「──んふぅうっ！　は、ふぅ……っ!!」
熱い鼻息が溢れて、陰毛に掛かった。
「上手(うま)ふ、れきないふぁも、しえないへろ……。お、お姉(ええ)ひゃん、頑張うふぁら……」
こそばゆさの中詩朱奈は邪魔な髪を片手で掻き上げ、弟の極太を口腔で扱き始めた。
──チュプ……。ヌチュッ！　じゅる……ずぶぶっ!!
「んひぃうっ！　は、く……ふぁっ!!　姉、さんッ！」
窄めた唇が節くれ立った幹を圧迫して、唾液を塗りたくるように何度も擦る。

（は……う、舌でっ、そ、そんなにっ!!　されたら、変になっちゃうよ……）
　その間にも舌の先が熱心に亀頭をもてなしていた
　——にちゅっ!!　ねりゅっ！　ねぶっ、ぬぷぬぷっ!!　ぬりぃっ！　にゅちちゅっ!!
　鈴口から溢れるカウパーを掬って、裏筋になすりつけながら亀頭を舐め下る。
「はぁ……ん、お汁、いっふぁいらね……。お口中(くひんなふ)ぁ、もぅ、ぬりゅぬりゅらお……」
　大きく張り出た雁傘の溝をなぞって穿り返す。
「んひぅううっ！　くっ、ふっ!!　はぁはっ！　ん、あ、はぁ……ッ!!　くはっ！」
　灼熱の固まりが下半身で膨れあがって、脳裏を狂わせた。たまらずもっととせがむように腰を迫り上げてしまいながら、手を伸ばして詩朱奈の髪に指を絡ませる。
「あむぅ……。はっふんぅを、おひんひん……。おおひいをに、はわひぃ……。ん、ふぁ……おねぇひゃんぅを、おくひ、気持(ひも)ひいいぅを？　はっふん……祐(はふふ)う……っ!!」
　弟に頭を抱えられ、詩朱奈の興奮も高まる。
　ぬちゅ、ぬちゅ……。ぺろ……くちゅ、ねちゅ、ちゅるうぅ——っ！
　唾液の音色を激しくさせ、舌を大胆に躍らせて幹肌全体を舐め回してきた。
「ん……くぅ……!!　そん、な……されたら、僕、もう……。ふぁはぅううっ！」
　敏感な神経が熱を帯びて、焼き切れそうな歓喜に目が眩む。
　——ぢゅぅううぅ——ッ!!
　それでも彼女は許してくれず、喉の奥で亀頭を絞りながら、尿道を吸い上げてくる。

勢いを増す抉り込むようなストロークに、突き込まれる彼女も腰を迫り上げて迎え撃つ。
――パンッ！　ぱんっぱんっ、ぬぶるっ‼　ぐじょっ！　じゅぶっ‼　ぬっぷ、ぬぷっ、ぬぶずぶずぶぬぶっ！　ずんむっ‼　ヌズズンッ！
「くふぁあああっ！　あう……っ‼　またっ、込み上げてッ！　で、出ちゃうっ‼」
襞をうねらせ絡みつく膣壁の締めつけに、灼熱の濁液が押し寄せる。
「ひぃいいんっ！　ふぁああうっ‼　はっ、ぁあああああっ！　だ、だめっ‼　なにか……お、おくからぁっ、き、きちゃ……ふぁあああっ！」
次第にヴァギナが収縮し、子宮壺が奥から迫り出して亀頭とぶつかる位置が浅くなる。
細く小さな身体が腰を中心に震え出し、激しい痙攣へと見舞われた。その刹那、
「あぁあああっ、はぁああああぅうううっ！　い、いくっ‼　祐の、が……ッ、膣内ぁっ！　い、い、イィッ‼　イクぅううっ！　ふぁあはぁあぁ――――ッ‼」
――ぷぅっじゅぅうううぅうぅ――――ッ！　じゅぶっ‼　ビュブビュブビュルッ！
ぷじょぉおおおっ‼　じょぼじょぼじょぼじょぼ――――ッ！
男根をめり込ませた肉壺の脈動と共に、絶頂の熱い飛沫が睡蓮の膣穴から溢れた。
――どっぴゅぅうううっ！　びゅるびゅるびゅるっ、びゅぶっ‼　どびゅっ、どぼどぼどぼっ！　ビュッ‼　ビュブウッ！　どびゅびゅぅ――――ッ‼
膣内の熱い熱濁にまみれて肉幹を極限まで膨張させながら、祐の尿口から濃厚なスペルマが噴射する。戦慄き続ける睡蓮の子宮へと白濁の孕み汁を降り注ぐ。

（く……はぁ、睡蓮の、膣内にも、い、いっぱい……）
理性が溶けるような快感に意識が朦朧としてしまう。歓喜に打ち震えてしがみついてきた、庇護欲を掻き立てる細い肢体を強く抱き返す。
「あ……はぁ……う、また、祐と、気持ちいい、こと、出来た……」
仄かに甘い香りを漂わせる藍色の髪に顔を埋め荒い呼吸を繰り返していると、他の誰にも聞かせないようにと、意地っ張りな少女が小さく囁いてくる。
「す、睡蓮……。僕も……嬉しい、から……」
これから長いつき合いになりそうな彼女へそっと囁き返すと、小さな唇から安堵したような溜息がこぼれた。ぐったりと睡蓮の上から崩れ落ち、傍らに仰向けとなって身を投げ出す。満ち足りた疲労感に荒く呼吸を乱しているが、怒張はまだ治まらない。
それどころかまだ物足りないといわんばかりに急角度で屹立して、白く濁ったヌメリを纏ったまま脈打っている。
「あぁ～、たっくんの……すごくなっちゃってる～っ！」
その治まらぬ勃起を嬉しそうに、詩朱奈がはしゃぎ立てる。
「で、では……わたくしも、祐殿の……膣奥まで、いっぱい、ください……」
もう我慢出来ないとばかりに生真面目な顔を上気させて、冴が膝立ちに跨がってきた。
「あう……下着って、邪魔ですね……。こんなの穿いてると、えっち出来ませんっ‼」
短い藍色のスカートの中から、汗と愛液でじっとり湿った純白のショーツをもどかしそ

うに脱ぎ下ろすなり、暴発寸前な勃起の先端へと腰を沈めてきた。
——ぬぅずずぅううっ！　ぬぶっ‼　ずぬぬぬぬぬぬぅううっ！
「んふぁあぁぁ、は、あああ、あくぅうぅ————————ッ‼」
顔つきから感情が読み取りにくい彼女のヴァギナは、失禁したみたいに愛液が溢れかえり、祐のペニスが挿入ってきた途端、はしゃぐかのように激しく襞を脈打たせた。
(ひ————ぅうっ‼　冴、さん、もう、こんな……にっ！)
無表情な美貌を挿入の刺激に硬く強張らせただけの癖に、おま○こはイヤらしく乱れ狂っている。もしかすると、下半身をうまく隠したまま人前で挿入しても、彼女ならばばれないんじゃないだろうか？
実際には汗ばんだ頬が紅潮しているし、目元を潤ませながら悩ましく喘ぐから、そんなわけない。それなのに膣内と表情の極端なギャップに、よからぬ妄想が浮かんでしまう。
——びゅぶるっ‼
「くふぁあっ⁉」
途端に、ギリギリまで込み上げていたスペルマがこぼれ出た。
いままではかなり際どくても、どうにか相手を絶頂させるまで持ちこたえられた。
しかし続けざまに射精を繰り返し、祐の括約筋は疲れ切っていた。愛液とカウパーで築き上げた潤滑に、粘度の高いヌメリが加わる。それでもストロークは激しさを増しゆく。
腰をくねらせながら男根に襞を絡める冴の膣へと、下腹を迫り上げて力強く突き込む。

――ねじゅるっ！　ぴゅぶっ!!　じゅむっ！　ぬぢぬぢにぶっ!!　びゅっ、ドビュッ！

（う……あ、あぁ……射精ながら……こ、擦れてッ!!　こんなっ！　す、すごい……ぬるぬるっ!!　き、気持ち、よすぎる――ッ！　ふぁ、ああああぁっ!!）

蠢く襞との間に濃厚な熱濁が挟み込まれて、直接の締めつけ感は弱まった。しかしその代わりに、とらえどころのない浮き立つような摩擦が、勃起肉全体を翻弄する。

「はわぁっ!?　へ、変ですッ、これぇっ!!　ん……あぁ、こ、こ、こんなっ!!　ああああぁ、す、すごいっ、射精てますっ！」

敏感な粘膜を滑りながら易々と奥まで到達し勢いよく子宮を突き上げる抽送に、冴も狂おしく気持ちよい違和感を覚える。

「お膣なかぁっ!!　はっ、はわっ！　ん、んふぅうっ!!　熱いのが、いっぱいっ！　射精されながらっ、突かれてっ!!　にゅるにゅるっ、膣内がっ！　んふぁあぁっ!!」

鈴口から直接射精たての新鮮な精液を、極太に突きまくられながら子宮に注がれる。その喜悦に白い胴衣を捲り上げて晒した美乳を悩ましく波打たせ、藍色のベストを汗まみれにして身を捩る。

（くぁ、射精しながら、なんて、感じすぎちゃう……よ……）

堪えきった末の噴射みたいな激しさはないが、そのぶんいつまでも、どびゅどびゅと溢れ続ける。排尿の開放感を濃厚にしたような心地よさがその間ずっと股間で渦巻く。

――ねじゅっ！　ぬちゅっ!!　ぬぶぶっ！　ぐずぶんっ!!　べじゅるっ！

収まりきらずストロークの度にペニスに圧されて、膣内から溢れ出る白濁が冴の尻が跳ね上がる度に二人の股間の間で白い糸を引いて、脱力的な生臭さをまき散らす。
「な、なんて……匂い、させてん……のよっ!!」
その淫香に引き寄せられ、睡蓮がよろめいて這い寄ってくる。
「射精ながら、なんて……そんなこと、あたしのときにも、しなさいよっ、ばかぁっ！」
まだ股間から白濁した雫をぼたぼたと垂らしながら尻をくねらせ、祐の腕にしがみつくと小さな胸の膨らみと、濡れ緩んだ股間を押しつけて自分を慰める。
(あう……睡蓮、まだこんな、とろとろで……。身体、えっちなままだ……ッ！)
二の腕にささやかな柔らかさと、掌にねっとりとした熱い愛液を擦りつけられ、射精の勢いが増してしまう。
「――ひぃううっ！　そ、注がれて……、い、いっぱいっ!!　はぁあふぅうっ！　こ、これでは、孕んで、しまいますよっ!?　そんなの、嬉し……。も、申し訳ないです、姫様を差し置いてっ!!」
祐の子を宿す妄想を膨らませたのか、ヌメリ度は増しているというのに、ギュっと激しく剛直が締めつけられた。
「んふ……さっちゃん、たっくんの、赤ちゃん、産むの？　綺麗なおっぱい、きっといいお乳、たっぷりでるね～」
はだけたパジャマの前から、自分こそたっぷりと母乳を出しそうな巨房を揺らしながら、

詩朱奈が冴の背後から乳首をツンと上向かせた乳球を揉み捏ねる。
「ひゅはぅっ！　だ、だめっ‼　い、いまだめですっ、お乳ッ！　感じすぎですっ‼　どうにか、なって……あ、あああぁ、あっ、ふぁあああぁっ！」
詩朱奈の指の隙間から、むにゅんと白い美房が溢れ出る。
射精されながら膣を攻められるだけでもいっぱいいっぱいな肉体に、皇女直々の乳揉みを賜って、アーモンド型の碧眼が白目を剥いた。
「ひぁああうっ！　お、おやめ、く、くらは……ひぃいっ‼」
乳首を摘まれ転がされる刺激に、膣の襞が引き絞られる。
「――ッはぁああっ‼　すご……い、冴ぇっ！」
過剰なヴァギナの収縮に男根が押し出されそうになった。
そうはさせないと祐の抽送が勢いを増して、窄まる牝穴をこじ開ける。
――ズブッ、ズボッ！　ズムッ、ズブズブズブッ‼　パンッパンパンパンッ！
「おっぱいっ、おっぱい～♪　さっちゃんの、おっぱい、気持ちイイ～♪」
同時に詩朱奈の指も過激さを増して、脈打つ美乳房に食い込み柔肉を掻き捏ねる。
「ひぅうぅあぁ――ッ‼　ご、ご姉弟でっ！　私をっ、こ、こんな……にぃっ！　ひぁあっ‼　んぃ、ひぃいいいぃ――――ッ！」
冴の肢体がビクン、ビクンと断続的に硬直し、大きく痙攣する。
深く強く剛直を突き挿入ると、甲高く喉を鳴らして切羽詰まった眼差しを宙に漂わせる。

それでも許さず、詩朱奈が乳首を指先で弾き、祐が深々と子宮を突き拉げた。
ガクンと、さらに大きく、冴のしなやかな身体が痙攣する。
「ふわぁあっ‼　ああっ！　イ、イクッ‼　んふぅううぅぁあああっ‼　イッちゃいますぅうっ！　はわぁあっ‼　あっ、ああっ！　んひぃいぃ――――ッ‼」
――ぷしゅぶぅうっ！　ぬじゅっ‼　ぶびびっ！　ぶじゅっ‼　ぷっしゃぁあぁっ！
熱い絶頂汁が溢れかえり、膣襞の隙間にまでみっちりと染み込んだ白濁を洗い流す。
子宮から膣口まで、冴の胎内が急速に収縮して射精勃起を握り締める。
「くふぁあぁううっ‼」
どびゅうぅうっ！　びゅるっ‼　べびゅびゅびゅるっ、ぴゅばばぁあぁっ！
ヌメリすぎた抽送へのお返しとばかりに息が詰まるような圧迫感をもたらされ、残っていたスペルマが一気に噴きこぼれる。
「ひゅあぁあああぁ……。ま、また……たっぷりとぉ……」
――ぶびゅっ！　ぶじゅじゅじゅじゅぅ……ッ‼
ペニスがいっぱいに詰まった膣の隙間から白く濁った濃厚な液を大量に噴き散らかし、力尽きたようにへなへなとしなやかな肢体を祐の傍らに横たえる。
「あふ……。祐殿のお汁で、お膣の中、いっぱいです……。――あふぅっ！」
夢見心地な眼差しで、下腹部を指で押してみせる。すると、甘美の余韻に脈打つ膣口から、ぶびゅっ！　とさらにたっぷりな白濁が溢れ出た。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

ATOMIC POCKET NOVELS NEW RELEASE

あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル／毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価／690円（税込）

思春期なアダム3
一人泣きの子猫
［小説：さかき傘／挿絵：天海雪乃］

2010年7月下旬発売予定!!

「…藤田君は責任取るべき」
睦月への想いに身を焦がすマキナ
彼女は夜の教室で……!?

不死の吸血姫がドSのご主人様を募集しているようです
［小説：酒井仁／挿絵：にの子］

全国書店で好評発売中

「当方Mドレイ希望」
魔界最強のプリンセスがドレイ志願!?

借金お嬢クリス3
令嬢はいかにして42兆円を返済したか？
［小説：筑摩十幸／挿絵：了藤誠仁］

全国書店で好評発売中

クリス、悪魔堕ち!?
「愛するジグレット様のため、死んでもらいますわっ！」

既刊LINEUP 全国書店で好評発売中
- ●仙獄学艶戦姫ノブナガッ!　①〜③
- ●絢爛!帝都少女探偵団　赤い謀略を撃て!
- ●BLANGEL 輪になりて踊る愚者の夜
- ●借金お嬢クリス　①〜②
- ●プリンセスリバーシ!!　交錯する美姫と魔姫
- ●無敵の姫騎士がドMに目覚めたようです
- ●ピルグリムメイデン　①〜②
- ●呪詛喰らい師【カースイーター】
- ●魔海少女ルルイエ・ルル

KTC 発行◎株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル TEL:03-3555-3431（販売）FAX:03-3551-1208

▶最新情報は公式サイトへ！ あとみっく文庫 検索

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!